レオン・ド・ロニー研究
——1862年遣欧使節の若き洋学者たちとの出会い——

大蔵　親志

L'étude de Léon de Rosny
——Rencontre avec de jeunes occidentalisants——

OKURA Chikashi

幕末維新の知識人と言えば、まず福沢諭吉が挙げられる。当時、「天下の双福」と称されて巷間の人気を分けていた福地桜痴の名は、現代では忘れ去られているといってもよい。福地は20世紀初頭まで生きた人物であるが、晩年には既に過去の人間となっている。

福沢も福地も天保の生まれであり、前者は天保5年(1834)、後者は天保12年(1841)に生まれており、徳富蘇峰のいう「天保の老人」の世代に属するのである。その次の世代に属する蘇峰から、福沢は道徳を軽視した知に偏した人物と批判されたし、福地は忘れ去られた明治の大記者と評価されている。

福沢は福地より7歳年長であるが、大坂に生まれた福沢が長崎に遊学の後、大坂適塾に入学した安政2年(1855)は長崎に生まれた福地が、名村八右衛門について蘭学を学び始めた年でもある。福地は安政5年(1858)には江戸に出て、翌年には森山多吉郎に英学を学び、幕府に出仕し御家人に昇格している。福沢の英学への転向も福地と同じ時期であり、森山塾で二人は知り合いになっている。

福沢と福地の西洋との出会いについて語る場合、彼らとの交友を通じて西洋の事情を彼らに伝えたレオン・ド・ロニーの名を忘れてはなるまい。ロニーとの交友は両者共かなりあったと思われるが、福沢が『西航記』などでしばしば

触れているのに対して、慶応元年(1865)の2回目の渡欧でロニーとの交友を深めたと思われる福地は『懐往事談』などにおいてもその記述は福沢ほど多くはない。

福沢と福地も年少の時から学んだオランダ語・英語の学習を通じて西洋文明の一端に触れていたにせよ、ヨーロッパ文明に接した時、彼らの受けた精神的ショックは強烈であったであろう。福沢と福地たちは、フランス、イギリス、オランダ、プロシア、ロシアなどを訪問し、直接ヨーロッパ諸国の政治制度、経済構造、教育制度に触れることが出来たし、関連書籍を購入する機会を持ったわけである。その絢爛たる産業の発展を目の前にして、圧倒される思いだけが強く、当時のヨーロッパ文明自身が、政治的にも思想的にも内包していたその内部の深い矛盾には思い至らなかった。

福沢と福地が啓蒙思想家と言われる所以は、国家と社会の諸問題に対する関心、すなわち、当時の日本の時事問題への関心を著作、新聞発行を通じて世に示したことである。彼らが遣欧使節の一員としてヨーロッパに渡り、ロニーと出会うのは、1861年(文久1年)のことであるが、福沢は1866年(慶応2年)には『西洋事情』を刊行しているし、福地は、1868年(明治元年)に『江湖新聞』を発刊している。福沢の著作の中で、北フランスのリール図書館にあるロニーの蔵書に残された唯一の本が『西洋事情』であるが、福沢の献辞は書かれていない。ロニーは『アジア新聞』(1868)でその書評を行っている。

ロニーはそこで、福沢が江戸洋学者の中でも学識のある学者の一人であること、この本が彼から送られたものであると述べている。福沢の収集した正確な資料を高く評価しながらも、まだ多くの再検討の余地を残しているとロニーは指摘している。しかし、福沢の以後の著作がロニーに送られた痕跡が残されていない。福沢の『西洋事情』は当時のベスト・セラーを記録し、初編で15万部、海賊版を含めれば25万部に達したといわれている。

福地も巡回日記や見聞記の重要性は十分に認識していた。帰国後、見聞記を編集して竹内下野守に提出したが、竹内から上部に提出されたという福地の報告書は行方不明となり、彼自身も原資料を戊辰戦争の混乱の時に紛失してしま

った。福沢と福地のその後の運命を変えてしまった事件といえよう。そこには福地とロニーの交流を示す何らかの記述がもっと残されていた可能性がある。

福地はフランスで万国公法国際法を学ぶ目的で、慶応元年(1865)再び渡欧することになる。そして、フランス語を知らずして国際法どころではないことを知らしめられて、ロニーにフランス語を学ぶことになるのである。『懐往事談』によれば「外国方の一少年才子と云はれたる福地源一郎が我こそは此行にて万国公法の秘奥を学び、帰朝の上は雄弁を振ひ卓説を述べ外国公使等を俎豆礼譲の間に論折して彼が僭横傲慢を挫きて其胆を奪い其の心を寒からしめ、以て日本を九鼎大呂の重に安ぜんなれと思い込たる雄志大望は、僅か数日間の試験にて急に泡沫となり、転一転して仏語生徒と相成り」とある。

文久元年(1861)の12月23日に品川を出航した23名の幕府遣欧使節団を乗せたイギリス軍艦オーデイン号は、長崎に2日間停泊した後、文久2年元旦に、ヨーロッパに向けて出発し、6日に香港に到着している。諭吉は前回の派米使節の帰国の途次にも香港に寄港しているので2回目になる。香港で福沢たちにロニー的役割を演じたのは、ペリー提督の第2回来朝の節に随行し、帰国後『日本日記』を表した、広東人羅森である。羅森は一行の宿泊したホテルを訪問し、情報の交換を行っている。香港がアヘン戦争の結果、1842年以来英国の統治にあることは、既に諭吉たちの知るところであり、『西航記』によると「香港の土人は風俗極めて卑劣、全く英人に使役せらるゝのみ。或は英人と共に店を開き商売するものあれども、此輩は多くは上海広東より来れるものにて、もと香港の土人にあらず」と現地人の生活の状況に目を向けている。また、「仏蘭西の軍艦は停泊するものなし。唯商船4隻あり。」とあるように、1週間の滞在中も、港湾とそこに停泊中の軍艦の数、砲台、軍事訓練などに関心を示し、日本の国防問題が常に年頭にあったことがわかる。

当時、スエズ運河はまだ開通していなかった。パリーリヨンーマルセーユースエズーシンガポールー上海ー江戸という海のシルクロードを建設するという外交官レセップスの提言がナポレオン3世によって許可され、世界的な大工事が開始されたのは1859年のことである。1864年の第2回遣欧使節団(池田使節

団)一行34名がスエズを通過した時もまだ完成していなかった。

陸路でカイロに行き、アレクサンドリア港からイギリス大型客船ヒマラヤ号に乗って地中海を経て、それに面した南フランスのマルセーユに到着したのが4月3日午後3時半である。「昨日、3時半に要塞の大砲がヒマラヤ号の到着を知らせた。……早速、我が国の関係者が、第64連隊が表敬の任務を負っている高貴な日本使節団一行を迎えるべく、ジョリエット号に乗り込んだ」と当地の新聞は報じている。一行は、4時45分、騎兵隊に護衛されて好奇心で集まった群衆の中を通り抜けてコロニーホテルに到着している。ホテルではナポレオン皇帝の使者、トレビーズ侯爵の歓迎を受け、午後には、ノートルダム・ド・ラ・ガルド丘、新しい港などに案内されている。マルセーユ市民の使節団に対する関心は非常に高く「昨日から群衆が窓から一行の姿を見ようとして動こうとしない」状態であった。

4月7日朝10時半に一行はマルセーユを予定より30分遅れて汽車で出発している。この30分の遅延は、一行がエジプトのスエズからアレクサンドリアまでの経験にもかかわらず、汽車に乗ることに慣れなかったために起こっている。また、一行の4人がホテルに高価な宝石をつめた荷物を忘れて来たから出発したくないと言いはり、外務省の書記官が荷物は翌日にリヨンに着くからと説明してもなかなか納得しなかったためである。

一行がやっとリヨンに到着したのは午後6時である。「リヨンにおける大事件は、我々の町に昨日日本使節団一行が到着したことである。」と〈リヨン広報〉は報じている。リヨンはマルセーユとパリの中間に位置し、当時は絹、綿、ラサの産地であり、交易の町として発展していた。

一行は4月9日、午後6時過ぎにパリに到着している。ロニーはフランス外務省からフランス政府と日本使節との間の通訳に任命されており、日本使節歓迎委員会のメンバーでもあった。若きロニーは使節団の中でも若輩の「洋学者」の人々との交友を深めることができた。ロニーの日本語の知識の深さに若き洋学者たちは驚いている。残された手紙などから判断して、ロニー(24)の交友は自分よりやや年上の身分は低いが西洋の知識もある将来性のある人々に限られ

ている。福沢諭吉(27)(傭通詞)、松木弘安(30)(傭翻訳方兼医師)(後の外務卿寺島宗則)、箕作秋坪(37)(傭翻訳方兼医師)などがいた。やや年下ではあるが、身分が上位であった福地源一郎(桜痴)(21)(定役並通詞)、立広作(17)(定役並通詞)などとも面接はしているが交流は少なかったようだ。立は最若年ではあるが、日本使節の中で仏語を解する唯一の人物だった。福地との交流は、第1回の時はそれほど親密ではなかったが、慶応元年(1865)の第2回渡欧の時から深まったと思われる。

『福翁自伝』にも、使節団の若い人々の交流の模様が「使節は竹内、松平、京極の三使節、その中の京極は御目附という役目、それにはまた相応の属官が幾人もついている。それが一切の同行人を目っ張子で見て居るのでなかなか外国人に遇うことが六かしい。同行者は何れも幕府の役人達で、其中に先ず同志同感互に目的を共にすると云ふのは箕作秋坪と松木弘安と私と、此の三人は年来の学友で互に往来していたので、彼方に居ても此三人だけは自然別なものにならぬ、何でも有らん限りの物を見ようと計りして居るとそれが役人連の目に面白くないと見え、ことに三人とも陪臣で然かも洋書も読むと云ふから中々油断をしない、何か見物に出掛けやうとすると必ず御目付方の下役が附いて行かなければならぬと云ふ御定まりで始終附いて廻る」というように描かれているが、福沢と箕作と松木は行動を共にすることが多かったようで、福地、立の名はでてこない。

10数年前、十数枚の使節団の人々の写真の貼ってある一冊のアルバムとそれに添付された多くの書類が東大の資料編纂室に存在することが確認された。福沢、福地、松木などの実物の手紙がこの書類の中にあったのである。これらの書類は、ロニーによって準備されたものである。福沢などの著作の中での手紙の引用などからその一端は知られていたのであるが、ロニーのお陰で彼らとの交友の状況を一層くわしく知ることができることになったのである。

後になって、このアルバムは2部ロニーによって作成されて、他の一部はパリ東洋語学校に保存されていることが判明した。「書簡」と表題の付けられたところに集められた福沢、福地、松木など「洋学者」たちのロニー宛の手紙は、

全部で20通である。その内訳を見ると、松木弘安８通、福沢諭吉６通、箕作秋坪３通、太田源三郎１通、松木・箕作・福沢連名１通、福沢・箕作・松木・川崎連名１通となっている。

太田署名の一通は、私信というよりもロニーの日本語の語学力を保証した証明書のようなもので、ロニーの日本語の理解はすばらしいものがあるが、会話に関してはまだ不十分であること、それは日本人との接触が少ない状況では無理からぬことで、日本人と交流していれば数十日で上達するだろうと述べている。この手紙は太田の唯一の手紙で、使節団のヨーロッパ滞在中に書かれたものである。太田の名は、もう一通の連名の手紙の中にも見られる。

ロニーは1863年からパリ東洋語学校に設置され、５月５日に開講された日本語普及講座の講師として日本語教育を始めている。慶応３年(1866)、外国奉行として活躍し、フランス滞在中ロニーと交渉をもった栗本鋤雲は若いロニーの人柄、語学力などをよく観察している。栗本は幕府奥詰医師の時、長崎から回航されてきた「観光丸」に乗船したため、蟄居を命じられ長崎奉行の下役に左遷されたが、そこで病院設立、養蚕、紡績業の開発などの事績を残したし、後にフランス公使レオン・ロッシュの通訳として幕府とフランスとの外交交渉において栗本を助けた宣教師メルメ・カションと知り合いになっている。

「ロニー、歳20余、一個の奇書生なり。家至て貧なれども、産を不治、母に事て頗る孝なり。唯性議論を好み、善く人を詆毀す、故に人甚だ是を尊ばず」とある。鋤雲はロニーを議論好きで容赦なく相手をやっつけるやや狷介な性格の人物とみている。しかし、「然れども善く我が国の史書を読み、能く我国の事績を記す。日本史、日本記、日本外史の類、劉覧残すなく、傍ら雑書におよべり。」とあって、ロニーの勉強ぶりと日本に関する知識には一目を置いている。「現今、巴里に於て、日本語学校の教頭を命じられ、徒弟頗る多し。」とあるのは、先のパリ東洋語学校の日本語普及講座のことである。「屢々予の館を訪ひ、通常言語は故さらに訳者を謝し対話す。但、語音佶屈、且つ助詞を解せざるを以て、十中纔に三、四を諦聴せり。」とあって、ロニーの日本語を聞き取るには、かなりの努力と忍耐が必要だったようで、ロニーの日本語の会話力は太田

の時とそれほどの進歩はみられない。「ロニーは鉛筆を以て、我の字を書す。字格端正にして、且つ頗る速なり。自ら姓名を訳し、羅尼と書す。」とあるように、会話より読み書きに優れていたことが分かる。

松木・箕作・福沢連名の1通の手紙は、1862年の5月11付で出されている。パリ滞在中のロニーの親切な世話に対して感謝したものである。パリを出発してすぐ書かなければならなかったのに、ロニーの手紙が先に来たことを詫びている。ロンドンでの状況を伝えながら、パリでロニーから受けた配慮の深さに心から感謝の気持を示している。この日本文の漢字には振り仮名を振って、理解を容易ならしめるように気を使っている。

使節団一行がロンドンに着いたのは、4月30日である。日本使節が英外相ラッセル卿との会談に入ることができたのは、5月9日からである。1861年の品川英公使館襲撃事件がネックとなっていた。紆余曲折を経て、「ロンドン覚書」が調印されたのは6月6日のことである。ここに幕府の懸案であり日本使節の主要任務であった、新潟・兵庫・江戸・大坂の開港開市は、1863年1月1日から向こう5ケ年延期されることが決定された。

5月14日、日本使節一行は6月13日ウオールウィチ港を出発して、オランダに向かっている。オランダのハーグからの福沢の1通の手紙から、ロニーがパリからハーグに彼らを補佐するために来たことがわかる。福沢はロニーからの何通もの手紙に感謝して、早く会いたいと書いている。ロニーの家への招待には、多忙を理由に断っている。ロニーは母の病気のために、7月10日にパリに帰っている。この福沢のハーグからの手紙の特徴は、文語体の文の中に「です」「ます」の口語体表現の使用を試みていることである。これはロニーのような外国人によく理解させようという意図からではあるが、その後の文明開化の潮流の中で、西周や加藤弘之による運動、二葉亭四迷や山田美妙の言文一致体小説の試みなどの先駆をなすものである。

ハーグからの松木の1通の手紙は、前の数行は日本語で、ロニーの手紙を7月7日に読んだこと、ロニーがライデンではなくアムステルダムにいると聞いたから、ライデンに帰らなかったこと、7日にアムステルダムに行ったが、ロ

ニーがまだそこにいたとは知らなかったので訪問出来なかったことが書かれている。後半は英語で書かれ、ライデン大学教授のホフマンが日本使節滞在中はハーグに来ていること、日本使節はオランダとの間に重要な会談を残しているので、12日の出発は無理だろうと言い、日本に関する興味あるニュースがあれば教えてほしいと書いている。

ホフマンは当時57歳で、ライデン大学教授になってから10年が経過していた。欧米のみならず我が国の学者にも多大の影響を与えた『日本文典』が出版されるのは、7年後の1868年のことであり、ロニーがフランス国立東洋語学校に日本語講座を開講し、初代教授になった年である。

日本使節が訪欧した同じ年の6月に、最初の幕府留学生がオランダに派遣されている。海軍の研究のために、榎本釜次郎(武揚)、沢太郎左衛門、田口俊平、赤松大三郎、内田恒次郎が派遣された。洋書調所からは、西周と津田真一郎がライデン大学の政治・法律コースに入り、医学の研究のために、伊東玄伯と林研海がニュージーブ海軍医学校に入っている。また、留学生として、大工、鍛治、水夫頭など士分でない専門職も加わっていることが注目される。

このオランダ留学は、老中安藤信正とハリスの間で決定されたもので、アメリカへの軍艦の注文とその時に造船航海技術の修業を兼ねて留学生を派遣することになっていた。当時、アメリカで南北戦争が勃発しハリスが帰国してしまって、計画は中断され実現しなかった。ヨーロッパでオランダ語の流通力がそれほどでもないことを痛感した松木弘安が政府留学生の派遣先国はオランダ以外にすべきだと江戸に書き送ったりしたが、結局アメリカは南北戦争で混乱していたのでオランダに変更された。

ホフマンはオランダ殖民省の日本語通訳官として幕府派遣留学生の通訳として、これらの若い優秀な留学生の補導役となっていた。来日経験のないホフマンは、『日本文典』を完成させるに際して、彼らから日本語に関して多くを学んだことが知られている。

この年はオーストリアのウイーン大学で非公式に日本語講座が始まった年でもあり、ヨーロッパにおいて、日本文化、日本語に対する関心が徐々に高まっ

てきている様子が感じられる。

プロシヤの首都ベルリンからの松木のもう1通の手紙は、全て英語で書かれている。8月3日にブランデンバーグホテルに宿泊していること、プロイセンの言語が理解できないこと、プロシャの高官にフランスにはロニー将軍がいて、日本語ができ、既に日本を征服しており、そのうちアジアも征服するだろうと言ったら驚いていたと言った冗談が書かれている。英語はスペリングや構文に間違いが見られる。

ベルリンからの手紙に、箕作が日本語で書いた2通の手紙が残されている。その1通は8月3日付のもので、まずロニーの母の様態を心配し、続いてプロシアの科学が繁栄していること、滞在中に多くのことが学べて満足していることが書かれている。ロニーがいなくなって残念だと松木と福沢といつも話し合っていると書かれている。

箕作のベルリンからのもう一通の手紙には、日付がない。箕作はロニーの友情は決して忘れられないと言い、ロニーに会ったことが有益であったことを述べ、日本での再会を希望している。ロニーの示した親切に対しては感謝の言葉もないくらいだと述べている。そして、今後の情報の相互の交換を望んでいる。この箕作の感謝の手紙は心情の溢れるものであり、ロニーの人柄と日仏交流に対する熱意と若き洋学者たちに示した親切さを浮き彫りにしている。

リールにあるロニー蔵書中に、「呈羅尼君」と書かれた箕作からロニーに送られた『Graduated Reading comprising. A circle of knowledge in 200 lessons. Gradation I』(Hongkong, Printed at the London Missionary Society Press, 1956)が残されている。

ベルリンから8月3日付で投函された手紙に、福沢のものがある。ロニーがオランダを突然去ったために、さようならを言う暇もなかったことを残念がり、翌日ロシア汽船でペテルスブルクに向かうことを知らせている。ロニーがオランダでベルリンにも来ると言っていたことが実現しなかったことを残念がり、パリでの再会を約束している。ベルリンでは学校や病院を訪問して有意義な日々を送ったことが述べられている。福沢はこの手紙の追伸で、パリに帰ると

帰国まで3ケ月の余裕があるので、この機会を利用してフランス語を学びたいので、ロニーの知恵を貸してほしいと書いている。

一行は、ベルリンではブランデンブルクホテル宿泊し、7月21日の国王謁見、7月30日の「ベルリン覚書」調印を終えている。8月5日までのベルリンでの2週間は箕作、福沢の手紙にもあるように博物館、天文台、監獄、製鉄所など色々な施設を訪問している。日本使節団は8月5日にベルリンを出発し、8月9日にペテルスブルクに到着している。福沢たちがパリで再会と思っていたロニーが現れたのは8月17日のことである。彼らの驚愕した模様は『西航記』にもくわしく書かれている。

ペテルスブルクから出された福沢の1通の手紙は、ベルリンからのロニーの手紙に対する返事である。ロニーがペテルスブルクに来る前の8月15日に書かれたものである。ロニーが松木と太田に書いた手紙の返事を受け取っていないことに対して郵便事情の非能率さに触れている。ロシアに到着してから、国王との謁見以外は外出していないと述べている。そして、パリでの再会を約束している。追伸で、福沢はロニーの新聞に寄稿したいといいロニーの援助を要請している。

ロニーは1861年の4月から1862年の終わりまで、〈Le Temp〉新聞の東洋問題担当の専属記者であり、〈Le Temp〉新聞に掲載された日本使節一行の多くの記事を書いたと考えられている。

8月16日付のペテルスブルクからの箕作の1通の手紙から、ロニーがペテルスブルクへ行くと知らせたことがわかる。箕作はそれを知って非常に喜んで、ホテルに来てくれれば松木も福沢も待っているからと書かれている。追伸で箕作は、8時以降なら何時でもよいこと、明日は日曜日なので午後は植物園を訪問する予定なので、午前中に来てほしいと書いている。

日本使節一行はネヴァ河に望む帝室迎賓館に宿泊している。華麗な日本の調度、料理で接待されたことは、『福翁自伝』に書かれているように、ロシア外務省に橘耕斎ヤマトフがいたからである。橘は安政4年(1957)ペテルスブルクで刊行された日魯対訳辞典『和魯通言比考』を編集したI・Aゴシケービッチの協

力者であった。

ロシア政府と日本使節との交渉には、解決されるべき二つの問題があった。開市開港問題とカラフトの日露境界決定の問題である。前者は他国の先例にならって容易に解決したが、後者の交渉は難航を極め決裂に終わっている。

9月22日付のパリのグランドホテルからの1通の手紙は、福沢、箕作、松木、川崎(道民)、太田の連名になっていて、パリへの到着を知らせて、時間があればホテルに来てほしいと書いた短いものである。川崎道民(31)は佐賀藩の藩医で傭医師として使節団に参加していた人物である。今回の日本使節一行のパリ滞在は一週間であった。福沢たちはロニーに案内されてフランス学士院や国立図書館などを訪問している。福沢たちはロニーの日本への招待を考えて交渉していたが実現しなかった。

ペテルスブルクまで追いかけて来て福沢たちの便宜をはかってくれたロニーとの別離の時がきた。松木が出発の汽車の窓からロニーに投げ渡された一通の手紙には、ロニーの健康とパリでの再会を祈った簡単なしかし感動的なメッセージである。このメッセージにはロニーのコメントが残されていて、「この手紙は私の友人Dr.松木によって書かれたものである。出発の時、汽車の座席でこのメッセージを書き始めたが完成しなかったので、出発し始めた汽車の窓から私の方に投げ渡したものである」とある。

この別れの情景からも、またこれまでの手紙からも、ロニーと松木との関係は他の洋学者の中でも特に親密であったように思われる。松木は名前を寺島宗則と変えて薩摩藩の学生を率いて再びパリに来るのことになる。

1871年パリで刊行されたロニーの『日本詩歌選集』には、松木が揮毫した「写真術ハ造物者乃画に志て光輝はその筆なり」を仏訳を添えて採録している。松木のその後の状況、外務卿寺島宗則となったことなども触れられており、ロニーは松木の活躍を知っていたようだ。

日本使節一行は10月5日に次の訪問国ポルトガルに行くためにパリを去り、フランス西岸シャラント河口の港ロシュフォールに向かった。翌朝汽車を降りると、埠頭までの両側に軍隊の警備があったりして、フランス側の非礼な態度

に福沢たちは感情を害している。悪天候もあって日本使節一行はリスボンに着くまで10日間を要した。日本使節に提供された蒸気輸送船ライン号も小さな船で、船内での待遇も最悪の状態だつた。

リスボンに到着すると、福沢宛のロニーの手紙が届いていた。

10月19日付のリスボンからの松木の手紙が１通ある。これは全て英語で書かれており、ロニーの福沢宛の手紙が一行がリスボンのブラガンザホテル到着すると既に着いていたこと、そのロニーの好意に感謝している。松木はフランス蒸気輸送船が最悪であったこと、そのためリスボンへの到着が予定よりかなり遅れたこと、またこの船で１ケ月も地中海を航海しなければならないことを心配している。松木は横浜税関の通詞山内六三郎を紹介し、松木への手紙はそこ宛にしてほしいと書いている。松木はこの手紙の最後に、自分は薩摩藩に仕える者で、時々将軍に反対していることは事実であること、自分への手紙は日本の役人の介入なしに届けてほしいと書いている。また、通商のために薩摩の船を中国や近隣諸国に送りたいが、その最上の方法を教えてほしいと書いている。

この年の８月21日、松木の仕える薩摩藩の藩主島津久光は、行列の先を横切ったイギリス人を殺傷するという「生麦事件」を引き起こしていた。これは松木の帰国後、薩英戦争に発展し松木は五代友厚と共に捕虜になって、軍艦で横浜まで連行されている。その後、薩摩は攘夷の不可を悟り、有望な青年をイギリスに留学させたり、軍艦を購入したりするようになる。

10月20日付のリスボンからの福沢の１通の手紙がある。この手紙は全て英語で書かれている。かなり長文のこの英文の手紙の書き出しは、福沢の『西航記』にも書き留められている。福沢はリスボンに到着するとすぐロニーの手紙を受け取り、その友情に感謝している。福沢はロニーのことを「you are not only the good friend of me but an hearty lover of Japan.」と書いている。ロニーが手紙で知らせた日本に関するニュースに関しては今後も英訳して送ってほしいと書き、しかしフランス語の勉強も始めているので、そのうちに自分もフランス語でも読めるようになるつもりだと述べている。ロニーが日本に関して取り上げられた様々なニュースを福沢に知らせいた模様が理解される。福沢はこ

の手紙の最後に、任務は全て終えたので、24日か25日にリスボンを離れるとして、「Farewell my best friend ! I will never forget you in all my life I have the honour to be.」と書き送っている。

10月24日付、リスボンからの松木のもう1通の手紙がある。この手紙も全て英語で書かれている。この手紙は書籍購入の支払いに関するもので、支払いの収支にトラブルがあってビジネスライクな手紙になっている。ロニーが洋学者たちの書籍購入に際しても書店との間に立って苦労していた模様が理解できる。

日本使節一行は10月25日再びフランスの蒸気輸送船ライン号に乗って、10日間滞在したポルトガルを去って、27日にはジブラルタル海峡を通過したが、暮色と靄のためにジブラルタル要塞は見ることができなかった。10月31日アフリカ北岸アルジェの沖合を通過、老朽艦のため波涛に翻弄されながらやっとアレキサンドリアに到着したのは11月17日のことである。

11月17日付、アレキサンドリアからの松木の1通の手紙がある。この手紙は英語で書かれ、後半は英文と同じ内容の事柄が日本語で書かれている。その日付から到着したその日に書かれたものである。松木は船がアレキサンドリアへの到着に手間取った理由を述べた後、これから2ケ月の旅程があるにせよ帰国の途についたことを喜んでいる。早く故国に帰りたいという気持と共に、ヨーロッパを去ることの惜別の情を述べている。スエズから乗るヨーロッパ号で帰国すること、またこの船が日本を去る時には機会があれば日本の書籍をロニーのために持ち帰らせたいと書いている。

12月18日付、ポワン・ド・カレからの福沢の1通の手紙がある。この手紙は全て英語で書かれている。この手紙は福沢の最後の手紙である。福沢は松木へのロニーの手紙を見たことを述べた後、アレキサンドリアに到着するとすぐ数人の役人と荷物番としてスエズに向けて出発を余儀なくされて、返事を書く余裕がなかったので怒らないでほしいと書いている。11月20日にフランス汽船ヨーロッパ号でスエズをを立ち、28日にアデンに着いたことを書き、昨日ポワン・ド・カレに着いたことを知らせている。船上では仕事がないのでフランス語を勉強しているが理解しがたいと書いている。

11月18日に福沢などの身分の低い者は荷物番として貨物列車でカイロに向けて出発したが、途中で立往生したりして、カイロに着くのに20時間もかかっている。日本使節一行をスエズから乗せたヨーロッパ号は英国商船を改装したもので、帰国の際にはフランス軍艦セラミス号を提供するとしていたナポレオン3世の約束は反古にされてしまうのである。

12月31日付、シンガポールからの松木の1通の手紙がある。松木はヨーロッパ号でスエズを立ち、今週ここに着いたことを述べた後、船上では酷暑以外はニュースもないと書いている。ここからは他の船に荷物を移さなければならないとし、「The reason of our changing the ship is that the fight in Cochin - China (with the native being against the French Goverment) want more munition, wherefore the ship Europeen shall depart to Cochin - china」とコーチシナの情勢の変化でヨーロッパ号に乗れなくなったとしている。日本からのニュースは、全くないが「中国通信」によると大名の江戸からの離反が報じられているが真実だと思うと書いている。

日本使節一行はシンガポールでコーチシナ派遣艦隊司令長官ボナール少将の命令で、ヨーロッパ号からさらに小さいエコー号に乗り換えさせられた。インドシナ植民地拡大を意図していたフランスにとって、ヨーロッパ号が必要とされたからである。松木が世界の状況を的確に把握していたことが理解される。

1863年1月17日付、香港からの松木の1通の手紙がある。この手紙は全て英語で書かれており、かなり長い英文からなっている。松木は日本から受け取った手紙から知った江戸における参勤交代制の改革などに触れている。また、都の人々が井の中の蛙で外に出たことがないので外国人を受け入れようとしてないと書いている。続いて、香港で聞いたロッテルダムを出発したアルクエン号が喜望峰から香港に向かう途中に起こった襲撃事件について詳しく書いている。日本からオランダに送られた日本人の船が難破したのではないかという噂もあって心配したことが書かれている。次の土曜日に長崎に向けて出発し、その半ケ月号江戸に着くことを知らせて、最後に松木は「I am your oriental friend.」と書いている。

日本使節一行は諸国との外交交渉を終えて帰国の途につくのであるが、ロニーと交渉をもったこの若き洋学者たちが果たした仕事は、文化的業績として後世に残るものである。フランスの新聞は「洋学者たちは、イギリス、オランダ、ロシヤで、これらの国々の優れた著作を収集し、ここでもフランスの主要な人文科学・自然科学の出版物を買い上げ、江戸の翻訳者の図書を豊かなものにしたいと願っている」と書いている。

日本使節一行を乗せたエコー号は1863年1月20日香港を出発、順調に航海を続けて1月29日の夕刻品川沖に到着、一行は出発時と同じ芝浦波止場に上陸した。

1863年1月28日付、神奈川から出された松木の1通の手紙がある。この手紙は松木の最後の手紙で、全て英語で書かれているが、船が快速に神奈川に到着し、1年ぶりに帰国したことを喜んだ後、「Now at Japan it snow sometimes & is very cold. & I will ask you how is it in your country.」と書き、最後に送ることを約束した書籍が船の都合で難しくなったことを知らせている。

フランスにおける初代日本語教授となったレオン・ド・ロニーと若き洋学者たちとの交流はそれからの彼らの生き方に大きな影響を与えたものと思われる。ロニーはそれ以後フランスを訪問した様々な日本人と交流しており、奇特な日本学者として強烈な印象を残している。

北フランスのフランドル王国の時代に栄えたリールの近くにあるルースという寒村に生まれ、遠い東洋の果ての日本を夢見ながら生きたロニーは日本の地を踏むこともなくその生涯を終わっている。

Note

1. 「Notice sur un ouvrage japonais : FOUKOU-SAWA You-kitsi : Saiyauzi-zyau, 1866」. 〈Journal Asiatique〉. 1868. p.443-
2. 〈Le Sémaphore de MARSEILLE〉, 4/4/1862.
3. 〈Le Temps〉, 7/4/1862.
4. 『Antholgie japonaise, Poésies anciennes et modernes des insulaires du

Nippon』,1871.「雑歌の部」.

5. 〈Le Temps 〉. 1/10/1862.

Bibliographie

1. 『Léon de Ronsy. Premiére figure des études japonaise en France.』, L. CHAILLEU, 1986.
2. 『Un Érudit Loosois et Le Japon.』, Association Nord-Japon, 1987.
3. 『La mission japonaise de 1862 : FUKUZAWA Yukichi.』, R.SIEFFERT, 1974.
4. 『Les Études japonaises en France. Cinq étapes : Notes sur l'histoire et l'état présent.』,J.ORIGAS,1985.
5. 「Les lettres adressés à Rosny par les YOGAKUSHA pendant leur voyage en Europe.」,H.MATSUBARA,1987.
6. 「フランス東洋学とレオン・ド・ロニー」,(『諭吉手帳』no.2),松原秀一
7. 「文久元年遣欧使節とフランス」(蘭学資料研究会報告no.82), 芳賀徹. 1961.
8. 『大君の使節』,(中公新書)芳賀徹,1968.
9. 『福沢諭吉全集』(岩波書店)富田正文編,1958～1963.
10. 『懐往事談』(筑摩書房『明治文学全集11』),1966.